

「教育臨床総合研究23 2024研究」

島根大学教育学部附属学校園における 教科の学びを活かした系統的な探究学習カリキュラムの開発

Integrating Subject-Specific Learning Content into the K-9 Inquiry-Based Learning Curriculum

中尾 祐子*	大谷 由香*	小川 千秋**
Yuko NAKAO	Yuka OTANI	Chiaki OGAWA
岩間 香織**	神田 彩英子*	塚田 直樹*
Kaori IWAMA	Saeko KANDA	Naoki TSUKADA
江角 哲弥*	福田 大介*	猫田 英伸***
Tetsuya ESUMI	Daisuke FUKUDA	Hidenobu NEKODA
深見 俊崇***	松尾 奈美***	川路 澄人***
Toshitaka FUKAMI	Nami MATSUO	Sumito KAWAJI

要 旨

島根大学教育学部附属学校園では、義務教育学校における学校設定科目「未来創造科」を基盤として、幼稚園から9年生までの11年間を通じたカリキュラム・マネジメントを行っている。これにより、園児・児童・生徒には、地域や社会の課題解決に向けた探究的な学びを通して自己の生き方や社会のあり方を考える資質・能力を育むことを目指している。2023年度は、前年度まで取り組んできた各教科と未来創造科の学びの接続を具現化する取組を実践し、10月には保育・未来創造科研修会を開催した。参加者や本学校園教員を対象としたアンケートの結果からは、実りの多い成果を高く評価する声が多く上がったが、同時に、未来創造科での学びがどこまで・どのように学習者主導であるべきか、また未来創造科とICT活用推進の関係はどうあるべきか、など今後の検討課題も明らかになった。

〔キーワード〕 カリキュラム・マネジメント 教科学習 未来創造科

I 2023年度（令和5年度）の未来創造科

島根大学教育学部附属学校園では2019年度に附属小学校と附属中学校を統合し、新たに附属義務教育学校を設置した。その際、義務教育学校前期課程（6年間）と後期課程（3年間）にまたがる9年間一貫の科目として「未来創造科」を学校設定科目として設けることとした。

*島根大学教育学部附属義務教育学校

**島根大学教育学部附属幼稚園

***島根大学学術研究院教育学系

未来創造科は総合的な学習の時間と生活科を基盤とした科目であり、おおよそ各学年 70 時間程度を充てている。未来創造科の目標は以下のとおりである。

探究的な見方・考え方を働かせ、地域や社会が直面する課題に取り組む未来創造科の学習を通して、創造的な問題解決や未来志向的な構想・提案に携わることで、自己の生き方や社会のあり方を考えることができるようにするために、以下の資質・能力を育成する。

- (1) 地域や社会が直面する課題をテーマとした探究的な学習過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身につけるとともに、課題が生じる背景を捉えることができる。
- (2) 地域や社会が直面する課題の解決に向けて問いを立て、その解決に向け、試行錯誤し、探究の成果を地域や社会に対して発信・表現することができる。
- (3) 地域や社会が直面する課題をテーマとした探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを認めたり活かしたりしながら、地域や社会の未来を担うための行動を創造的に考え実践できる。

未来創造科の目標については森下ほか¹⁾で詳細に論じているが、未来創造科の主眼は、児童・生徒に地域や社会が直面する課題の解決に向けて試行錯誤を行わせるとともに、自分なりの創造的な提案を構想させ、その内容を地域や社会に対して表現、発信させることにある。このような探究的な学習過程を、義務教育学校 9 年間で発達段階に応じたテーマを取り上げながらスパイラルに経験させることで探究的な見方・考え方を育てることを目指している。また、附属幼稚園においても附属義務教育学校への接続の観点から「幼児期の終わりまでに育ってほしい『10の姿』」と並行して、「探究的活動の素地となる遊びを通じた体験」を重視した保育活動を行っている。本学校園では、附属幼稚園におけるこの 2 年間の学びも視野に入れ、未来創造科を軸とする 11 年間のカリキュラムを構想、実践している。表 1 が 2023 年度の各学年の単元名と探究課題の概略である。また、具体的な取組（一部）については島根大学教育学部の HP からのリンクから参照できる (<https://www.edu.shimane-u.ac.jp/docs/2022063000016/>)。

表 1 2023 年度 (R5 年度) の未来創造科の教育内容の一覧

学年	時数	単元名	目標を実現するための探究課題
9	70	住みたいまちプロジェクト ～「社会参画（貢献）」を軸にした体験活動を中心に～	どのような方策を立てれば、自分の考える住みたいまちを実現できるのだろうか。
8	70	地域課題探究②：社会と関わる ～職場訪問を軸にした体験活動を中心に～	企業活動とまちづくりにはどのような関係があるのだろうか。
7	50	地域課題探究①：社会を知る ～公民館訪問を軸にした体験活動を中心に～	公民館とまちづくりにはどのような関係があるのだろうか。*「まちづくり」…「地域の魅力や活力を高める」ということ
6	70	未来を創る ～平和学習を通して、みんなでめざす学校へ～	学校をよりよくしていくために、自分にできることは何だろう。

5	70	ふるさと森林プロジェクト ～未来へつなごう松江の森林～	松江市の森林をよりよくしようと働いておられる方の想いや願いに対し、自分たちにできることは何だろう。
4	70	松江祭撃行列 ～伝統を守るために～	松江市の伝統・文化であるどう行列を保存・継承するために、自分たちにできることは何だろう。
3	70	松江の宝 宍道湖のシジミ ～宍道湖のシジミを守るために、自分たちにできることを考えよう～	宍道湖のシジミを守るために、自分たちにできることは何だろう。
2	102	私たちのくらしと町 ～育てようおいしい野菜・調べよう石橋町～	自分たちの生活は、どんな「人・場所・もの」と関わり、支えられているのだろうか。
1	102	わいわいランド ～身近な「人・もの・こと」との関わりのよさに気付こう～	「わいわいランド」を通して「人・もの・こと」との関わりのよさに気付き、それらの活動をみんなにとってよりよく、より楽しいものにするために、どうしたらよいのだろうか。
幼2		興味関心をもった「ひと・もの・こと」に対し、友達と協同（共同）して調べたり、追求したりして遊び込む。	身近な環境（ひと・もの・こと）に進んで関わり、友達と一緒に考えたり工夫したりして遊びこむためには、どうしたらよいか。
幼1		園生活の中で自分の居場所をつくりながら、様々な「ひと・もの・こと」との出会い、安心して見つけた遊びに取り組む。	様々な「ひと・もの・こと」と出会いながら、自分の見つけた遊びを十分に楽しむためには、どうしたらよいか。

本校校園では2022年度より、児童・生徒が各教科での学びを未来創造科において総合的に活用する機会を充実させることを目指してカリキュラム・マネジメントに取り組んできた。その成果として、各教科で扱う教育内容や、各教科で養う資質・能力の中で未来創造科の内容と特に関連が深い単元をまとめた「未来創造科と教科とのつながり表」（以下、つながり表）が得られている（図1）。このつながり表は大谷ほか²⁾の中でカリキュラム・マネジメント総表と呼称されているものと同じものである。この知見の蓄積を基に、2023年度は未来創造科の全体計画のテーマを「[児童・生徒が]『他教科等で身に付けた資質・能力』を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにする」と設定し、具体的な教育実践に取り組むとともに、その成果を附属学校園主催の保育・未来創造科研修会において地域の学校へと発信した。本稿では授業公開を行った5つの学年の取組を取りまとめて報告する。

月	未来創造科	未来創造科					英語
		国語	社会	数学	理科	音楽	
4	Chromebookの使い方 ライブラーの使い方 PC室の使い方	【知識・技能】語を聞いて内容を理解し、情報を整理したりする。 【思考・判断・問題解決】情報の信頼性を判断し、必要に応じて情報を整理し、それを活用して表現する。 【情報・技術】目的や相手に応じて情報を整理し、それを活用して表現する。	【知識・技能】 地図帳の活用や統計資料を活用する力。 【思考・判断・問題解決】 社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとする態度。	【知識・技能】 多問連続的な解法力への意識を高め、解法力向上を促す。 【思考・判断・問題解決】 より速く正確な解法を導き出す力。 【情報・技術】 問題解決の過程を振り返り、より速く正確な解法を導き出す力。	理科の授業（全単元）で重要とされる探究の過程 【知識・技能】 ① 自然現象に対する気付き ② 課題の設定 ③ 仮説の設定 ④ 検証計画の立案 ⑤ 観察・実験の実施 ⑥ 結果の整理 ⑦ 考察・推論 ⑧ 結論を導く/表現・伝達	【知識】 音楽活動の楽しさや音楽の楽しさを伝える。 【思考・判断・問題解決】 音楽活動の楽しさや音楽の楽しさを伝える。 【情報・技術】 音楽活動の楽しさや音楽の楽しさを伝える。	【主学態】 多様性を受け入れながら協働的に学ぼうとする態度（他者理解） 【主学態】 多様性を受け入れながら協働的に学ぼうとする態度（他者理解）
5	ガイダンス	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【主学態】 多様性を受け入れながら協働的に学ぼうとする態度（他者理解）
6	講演会① 著作権について	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【主学態】 多様性を受け入れながら協働的に学ぼうとする態度（他者理解）
7	調査活動（長期）オリエンテーション 探究のためのレクチャー①	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【知識・技能】 【思考・判断・問題解決】 【情報・技術】	【主学態】 多様性を受け入れながら協働的に学ぼうとする態度（他者理解）

図1 未来創造科と教科とのつながり表（下の例は7年生）

II 保育・未来創造科研修会で授業公開を行った学年の指導実践

保育・未来創造科研修会では幼稚園年長組，第1学年，第5学年，第7学年，第8学年の5つの学年が授業を公開した。各学年の公開授業の詳細は以下のとおりである。

○日時 2023年10月17日(火)

○授業公開学年の単元名と本時の小単元名

- ・幼稚園年長組：わいわいランド ～興味関心をもった「ひと・もの・こと」に対し，友達と協同（共同）して調べたり，追求したりして遊び込む～
【本時】 いいこと考えた おもしろそう！ 1年生とやってみたい
- ・第1学年：わいわいランド ～身近な「人・もの・こと」との関わりよさに気付こう～
【本時】 わいわいおたのしみうんどうかいをしよう（45 / 97時間*）
*未来創造科の残り5時間は縦割り班活動
- ・第5学年：ふるさと森林プロジェクト ～未来へつなごう松江の森林～
【本時】 自分たちにはできることは何だろうか？（24 / 50時間*）
*未来創造科の残り20時間のうち13時間は縦割り班活動，7時間は宿泊研修における演習林に関わる活動
- ・第7学年：地域課題探究①：社会を知る ～公民館訪問を軸にした体験活動を中心に～
【本時】 公民館の取組と「住みたいまち」の関係を探究する（22 / 39時間*）
*未来創造科の残り11時間はinformation 未来（情報教育）
- ・第8学年：地域課題探究②：社会と関わる ～職場訪問を軸にした体験活動を中心に～
【本時】 地域で働く人々と「住みたいまち」の関係を探究する（36 / 52時間*）
*未来創造科の残り6時間はinformation 未来（情報教育），12時間は平和学習

次節では，各学年における教科の学習，保育において園児・児童・生徒が身につけたさまざまな経験や知識が，未来創造科の教育実践とどのように関連付けられているのかを説明するとともに，その教育成果について記述する。

1. 幼稚園年長組における未来創造科に向けた保育：わいわいランド

幼稚園では未来創造科の基盤となる「探究的活動の素地となる遊びを通した体験」を重視した保育を行っており，主体的な遊びを通した「遊び込む子ども」（友達と協同・共同して調べたり，追求したりして遊びに取り組む子ども）の育成を目指している。日常の保育においても子ども同士の交流を重視とした活動を頻繁に取り入れていることに加え，幼小接続カリキュラムの重要性も念頭に置き，年長組の活動を義務教育学校1年生の未来創造科の教育内容とオーバーラップさせた「わいわいランド」を設定している。わいわいランドでは幼稚園年長組の園児と1年生が1年間の交流を通して「である」，「関わる」，「ふかめる」，「たかめる」と段階を経て，安心して交流したり，教えてもらうばかりではなく幼児期の学びを活かして，幼稚園からも年上の1年生にアプローチをして関わりを深めたりするなど，活動の充実に努めている(図2)。

紙幅の都合上、すべての活動を詳述することはできないため、ここでは研修会で公開したわいわいランド⑤の活動を例として取り上げる。わいわいランド⑤は、1年生から届いたビデオレターにより、園児が1年生と一緒に「わいわいお楽しみ運動会」を開催することを知ることからスタートした(図3)。園児は楽しみな気持ちを膨らませながら、みんなで競技を考えていくという共通のめあてをもつことができていた。この「めあてをもつ」段階が幼稚園段階における探究的な学習過程における課題の設定にあたる。続いて園児に、自分たちがこれまでに見つけたさまざまな遊び(土・砂・泥の遊び、身近な小動物・昆虫と触れ合う遊び、季節の自然と触れ合う遊び、体を動かす遊びなど)と「わいわいお楽しみ運動会」とを関連付けて考え、実際にいろいろな遊びを創造的に試してみる時間を与えた。この「やってみる」段階は探究的な学習過程では情報の収集を意識した活動である。その後、実際に遊びの中で得た気付き・体験的な事実を基にしながらいちいちお楽しみ運動会を振り返り、話し合いを行わせた。まだ言葉も拙い園児であるため、話したいことを子どもが言葉や身体などを駆使して表現することができるよう、保育者は共感を示すことで伝えたい気持ちを広げ、やり取りを広げていった。また、特に新たな工夫を表現しようとした場面や、園児同士あるいは1年生を意識した思い、気持ちを伝え合っている場面等に対しては保育者が積極的に価値付けを行った。話し合いの結果、これまでの1年生との継続的な関わりの積み上げもあり、自然と「自分たちが楽しみながら、1年生と一緒に力を合わせて頑張ることができるような競技」になることを願う声が上がったことは興味深い。また、話し合いで出てきた複数の遊び(色水遊び、泥団子づくりなど)の中から園児が個人やグループでテーマを選んでその遊びを活かしてどんなことが出来るかを話し合いながらやってみる時間を取った(図4)。この「考える・試す・工夫する」段階は探究的な学習過程の整理・分析に相当する。そして、先の「やってみる」(情報収集)とこの「考える・試す・工夫する」(整理・分析)の過程を繰り返すことで、園児は実際

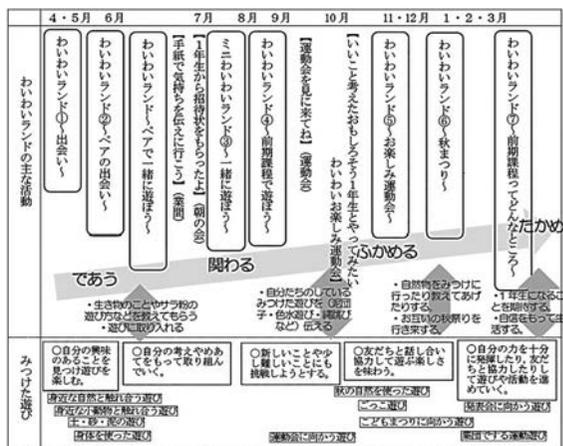


図2 わいわいランドの年間計画



図3 1年生からのビデオレター

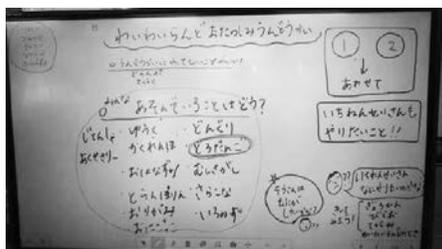


図4 自分たちの遊びの振り返り

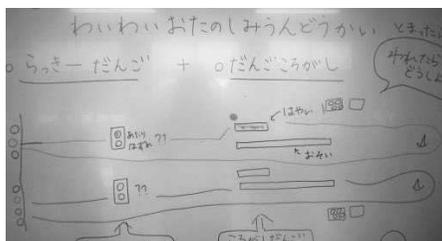


図5 ラッキー団子+団子転がし

自分たちが楽しみながら、1年生と一緒に力を合わせて頑張ることができるような競技になることを願う声が上がったことは興味深い。また、話し合いで出てきた複数の遊び(色水遊び、泥団子づくりなど)の中から園児が個人やグループでテーマを選んでその遊びを活かしてどんなことが出来るかを話し合いながらやってみる時間を取った(図4)。この「考える・試す・工夫する」段階は探究的な学習過程の整理・分析に相当する。そして、先の「やってみる」(情報収集)とこの「考える・試す・工夫する」(整理・分析)の過程を繰り返すことで、園児は実際



図6 運動会当日

に遊びの中で得た気づきを活かし、自分たちで考えた競技を実現させていった(図5)。「わいわいお楽しみ運動会」当日の様子としては、園児は1年生やペアの園児と力を合わせて頑張りながら、自分たちが作った競技を精一杯楽しんでいた(図6)。その後、他の園児や1年生と一緒にめあてに向かって遊ぶ楽しさについて振り返りを通して感じさせることで、次のわいわいランド⑥(秋祭り)への意欲につなげた。

授業を公開した「考える・試す・工夫する」(整理・分析)の場面の本質は、園児たちがそれぞれ別の時・状況での体験から得た知識や感情を「わいわいお楽しみ運動会」という目的と関連付けながら、他の園児と共有している点にある。この場面は少し言い換えると、園児たちが「わいわいお楽しみ運動会」を成功させたいという共通の課題意識のもと、園児一人一人が自らのあそびの体験から新しい競技を構想し、その内容を他の園児たちに向けて表現しているということになる。このような活動が上述の未来創造科の主眼とパラレルな構造を有していることは明らかであろう。

表2 幼稚園年長組における未来創造科に向けた学び

探究的な学習過程	学習過程の具体的な活動
課題設定	「わいわいお楽しみ運動会」の競技を考えるというめあてをもつ。
情報収集	自分たちがこれまでに見つけたさまざまな遊びを思い出したり、実際にやってみたりする。
整理・分析	どんな競技ができるかを話し合いながら創造的に考えたり、工夫を追加したりする。
まとめ・表現	「わいわいお楽しみ運動会」で実際に行う。
日々の学びとのつながり：幼児期の終わりまでに育ってほしい資質や能力(10の姿)すべて(1)健康な心と体、(2)自立心、(3)協同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活と関わり、(6)思考力の芽生え、(7)自然との関わり・生命尊重、(8)量・図形、文字等への関心・感覚、(9)言葉による伝え合い、(10)豊かな感性と表現	

幼稚園には教科の学びは存在しない。しかし、園児は教科知識以外の多くの知識をもっている。それまでにどこかで見聞きしたり、実際に体験したりして「知ったこと・知っていること」、「感じたこと」、「考えたこと」などはすべて教科の学びの基礎となる大切な知識である。本園では園児が個別の体験から獲得している知識を他者と共有し、他者とともに操作しながら新しい考えを生み出していく経験を大切にしながら、未来創造科の素地の育成を図っている。

2. 第1学年における未来創造科：わいわいランド

第1学年の未来創造科においても、前節で述べた「わいわいランド」(1年生と附属幼稚園年長組との交流)を中核的活動として位置付け、年間を通して幼稚園とカリキュラムを合わせながら取り組んでいる。ただし、第1学年のわいわいランドのねらいは幼稚園年長組のねらいとは大きく異なる。1年生に向けては、交流活動の中での「人・もの・こと」との関わりを反復的に振り返らせる中で、①「人・もの・こと」と関わることの楽しさや心地よさを感じたり、②相手の気持ちを考えた関わり方を考えたり、③自分の成長に気付いたりすることができるようになるよう指導を行っている。つまり、幼稚園年長児には「自分の想い」を中心とする探究

的な学習過程を経験させることを重視しているのに対して、1年生には、年長児と自分たちとを比較することで自らの成長を自覚させながら他者意識を養い、「年長児に対する配慮」を中心とする探究的な学習過程に取り組ませることを重視している。

研修会では、幼稚園と同様、わいわいランド⑤の1年生側の授業公開を行った。1年生のわいわいランド⑤は年長組に向けたビデオレター作りから開始した。まず、課題設定の段階として、幼稚園の（本物の）運動会の応援に出かけた経験を振り返りながら、「年長さんと一緒に、自分たちオリジナルの運動会を作って楽しみたい」という願いを高めた。この願いを基盤として、「どんな運動会にすると年長さんも一緒に楽しめるだろうか」という探究課題を設定し、相手の立場に寄り添って活動を考えられるよう促した。情報収集の段階では、「わいわいお楽しみ運動会」を計画する上で必要だと思う事柄について、これまでの1年生での教科での学習（体育科の「とびっこあそび」、「なげっこあそび」、算数科「かずをさがそう」、図画工作科「きらきらセロファン」）や、園児との過去のわいわいランドでの交流の振り返りを行った。そして、年長児が普段している遊びややってみみたいことなどをビデオレターで尋ねることを決め、ビデオレターを作成した。その後、年長児から返ってきたビデオレターを通して情報を収集した（図7）。続く整理・分析の段階では、年長児とともに「わいわいお楽しみ運動会」がよりよい活動になるように、感じたり考えたりしたことを互いに伝え合い、計画を練り上げていった。その過程では「年長さんにとっても、いままでの経験を使ってできるものがある」、「結果とかけないで『頑張ったな』と思える運動会にしたい」、「運動会の飾りも自分たちで考えたい」、「ペアじゃない人とも仲良くなれる運動会にしたい」などの声子どもたちから上がった。当初の競技候補としては「転がしドッジボール」、「コインキャッチゲーム」、「玉入れ」、「虫当て」、「紙飛行機とばし」など多種多様な競技案が出されたが、「自分たちが目指す運動会のあり方」という視点に立って、また実際にやってみることを通して競技を絞り込んだり、工夫を考えたりしていった。その中で今まで一緒に遊んだときのペアの年長児の名前や、実際に年長児の運動会で見た年長児の様子・特徴（苦手なこと）について相手意識をもって具体的に思い浮かべている姿が見られた。そして最終的な競技として2つのクラスからそれぞれ「障害物リレー」（平均台、お玉でボール運び、物まねの「お題」くじなど）と「縄跳びリレー」（大縄くぐり、前跳び [1年生5回、年長児3回]、へび縄跳び、走り跳びなど）が作られた。いずれの競技にも年長児向けの特別ルールを考えており、当初の課題意識に沿って情報の整理・分析が適切にできている様子が見られた。最終のまとめ・表現の段階では、練り上げてきた計画を基に、ペアの年長児の安全や気持ちを考えながら「わいわいお楽しみ運動会」の準備を行い、楽しく運動会を実施した（図8）。



図7 年長児からの返信ビデオレターを視聴した後のまとめ



図8 障害物リレー（左）、縄跳びリレー（右）

表3 第1学年における未来創造科での学び

探究的な学習過程	学習過程の具体的な活動
課題設定	「わいわいお楽しみ運動会」の競技を考えるとというめあてをもつ。
情報収集	自分たちがこれまでに見つけたさまざまな遊びを思い出したり、実際にやってみたりする。
整理・分析	どんな競技ができるかを話し合いながら創造的に考えたり、工夫を追加したりする。
まとめ・表現	「わいわいお楽しみ運動会」で実際に行う。
教科学習との主なつながり（単元・教材）：国語科「こえをとどけよう」、「みんなにはなそう」、「はなしたいなききたいな」、体育科「とびっこあそび」、「なげっこあそび」、算数科「かずをさがそう」、図画工作科「きらきらセロファン」など	

3. 第5学年の未来創造科：ふるさと森林プロジェクト

鳥根県は県の総面積のうち森林の面積が78%の割合を占めている。この森林率は全国4位であり、鳥根県は全国有数の森林県である。その中で、松江市の森林率は52%であり県内では一番低いが、市内の辺縁部には森林が広がっている。本学年の児童のほとんどが市内の中心部に居住しており、普段の生活の中で森林を身近に感じる経験はほとんどない。森林は私たちの生活になくてはならないものであるが、児童は普段の生活で使っている机や棚などが森林とつながっていることを意識することはあまりない。また、「森林＝田舎」のイメージをもっている児童も多く、自分たちの生活とは遠く離れた存在として捉えている。まして、林業に携わる人々は、児童にとって意識の外にある存在である。第5学年の未来創造科では林業を扱うが、ちょうど第5学年の社会科では国土の地形や第一次産業について学んでおり、題材のレベルで未来創造科と教科学習がつながっている。社会科の知識も生かしながら、未来創造科では、児童が森林のよさや林業に携わる人々の思いや願いに触れる学習活動を通して、森林の活用や林業について自分たちができることを考え、実際に行動する経験を積む学習を構想した。

第5学年の未来創造科は4つの小単元で構成されている。研修会で授業公開を行ったのは小単元3「自分たちにできることは何だろう？」の部分である。この小単元では、松江市の森林をよりよくしようと働いておられる人の思いや願いに対して自分たちにもできることを自ら考え、実践させることを目指した。具体的な活動としては、まず課題設定の段階において、松江の森林を管理・活用している人の思いや願いに触れさせ、自分たちにもできることがあるという課題意識をもたせた。続く情報収集の段階では、小単元1「『森林』と私たちの生活との関わりは？」、小単元2「誰が木を伐っているの？」の中で児童が調べたり、体験して感じたりしたことを振り返り・まとめた。そして、これまでの学習で関わった方々から得た松江市の森林・林業についての事実情報、それらの方々の思いや願いなどを整理・分析させ、自分たちにも何かできることはないかという視点から考えさせた。その結果、まずは森林の大切さをさまざまな人に伝える・広報することが重要であるという意識が自然に芽生えてきた(図9)。その後、より具体的にどんなことを広報すると良いかについて考えさせるところ、さまざまな意見が出てきたが、最終的には「みんなに木材をもっと使ってもらう」、「森林の魅力や大切さを知ってもらおう」、「林業で働きたいと思ってもらう」の3つの目標に集約された。そこで、同じ目標を目指す児童でグループを作り、「いつ」、「どこで」、「だれに」、「何を」、「どのように」の視点

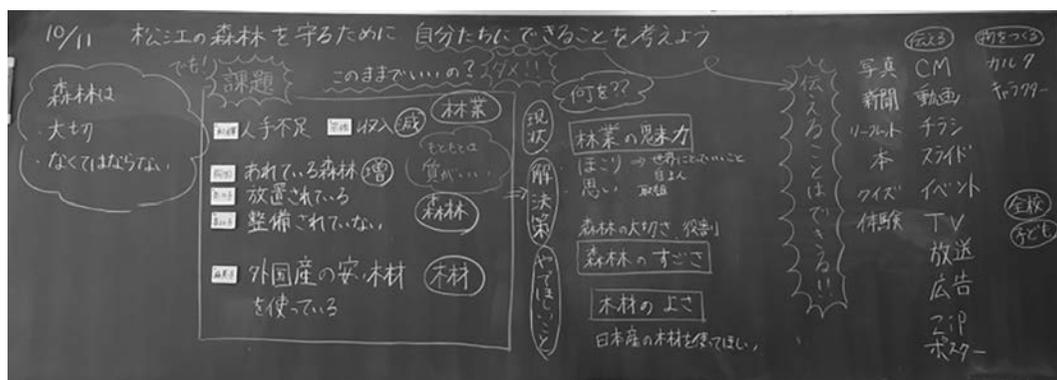


図9 松江の森林を守るために自分たちにできること

で、どのような広報活動であれば効果が上がるかについて話し合わせた。その際、思考ツールを使用させるとともに適宜声掛けを行いながら、目標に対して方法（対象や内容）が適切に選択されているかについて意識を向けさせた。例えば、図10は「林業で働きたいと思ってもらう」ための手立てを考えたグループの資料であるが、対象として「学生」「若者」という言葉が挙げられている。話し合いでは、まだ就職していない人を対象とする必要性や、むしろ大学生ではなくもっと職業選択が不確定な中学・高校生、さらには子どものほうが対象として良いのではないかといったやり取りが行われていた。さまざまな社会的な要因を頭に思い浮かべながら、当事者として自分たちができることをきちんと意識して整理・分析を行うことができていた。

最終段階であるまとめ・表現の場面では、グループごとに計画してきた広報活動を行う場を設定し、実際に自分たちで実施させた。その中の1つが森林をテーマとする附属学校園イベントである。このイベントには附属幼稚園の園児、前期課程低学年の児童、後期課程の生徒も参加した。また、教室等に向向いてのイベントの事前告知・宣伝についても児童に計画させ、行わせた。イベントは複数のグループが合同で開催されることとなり、丸太切り体験やスライドでのプレゼンテーション、紙芝居、すごろくなど多種多様なブースが用意された(図11)。なお、このイベントで使用する木材は児童が林業関係者の方と交渉をし、分けてもらったものを使用した。その後の小単元4「自分たちの活動を振り返ろう」では、児童はこれまでの学習を振り返り、成果や課題、改善点をまとめ、これまで学習を支えていただいた学校外の方たちに向けて学習報告会を行った。

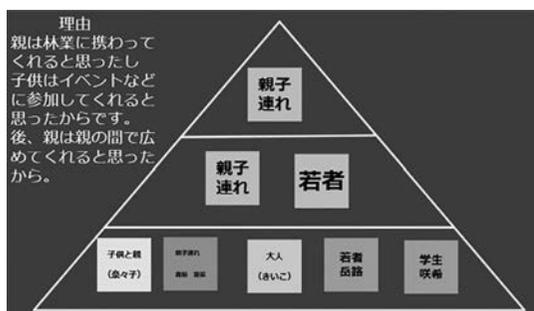


図10 森林イベントの初期案



図11 森林イベント当日の様子

表4 第5学年における未来創造科での学び

探究的な学習過程	学習過程の具体的な活動
課題設定	松江の森林のために自分にもできることがあるという意識をもつ。
情報収集	これまでの小単元1, 2で学んだ, 松江市の森林・林業についての事実情報, 林業に携わる人々の想いや願いを振り返る。
整理・分析	自分たちにできる活動を具体的に考える。
まとめ・表現	イベントを開催したり, ポスターなどを実際に作成したりする。
教科学習との主なつながり(単元・教材): 国語科「事実と考えを区別しよう」, 「知りたいことを聞き出そう」, 「問題を解決するために話し合おう」, 社会科「国土の地形」, 「第一次産業」など	

4. 第7学年の未来創造科：地域課題探究① 社会を知る

第7学年では第6学年までの学びを踏まえ、「社会を知る」をテーマに地域の公民館を訪問し、公民館の取組と地域の関わりについて整理・分析することを通して「住みたいまち」について考える。少子高齢化や地域のつながりの希薄化などが進む近年、公民館は社会教育施設としての役割のみではなく、地域の交流を活性化し、人づくり・地域づくりの拠点としての役割も担っている。鳥根県においても、公民館は「つどう・まなぶ・むすぶ」機能を生かして住民同士をつなぎながら、住民の地域への関心や愛着を育むとともに、住民が主役となった地域づくりを行っている。このような公民館の取組を踏まえ、第7学年の未来創造科では、生徒が公民館を訪問して実際に活動に参加したり、地域の人と関わったりすることで、人々が想いをもって誰かのために活動していること、人と人がつながることによって地域がつくられることに気付き、「住みたいまち」についての思考が深まることを期待している（なお、この公民館を題材とする指導の開発過程は佐藤ほか³⁾に詳細をまとめているので参照のこと）。

第7学年の未来創造科は3つの小単元で構成されている。2023年度の保育・未来創造科研修会では小単元2の中の授業を公開した。小単元1においては、最初に現段階での「住みたいまち」についてのイメージを言語化する活動を行った。その際、マッピングの手法を用いて自由に思いついた言葉を残させておき、後の小単元3で生徒自身が活動全体を振り返る材料となるようにした。その後、「住みたいまち」にはどのような条件が必要なのかを多面的・多角的に考えさせ、子ども、大学生、働く世代、高齢者の4つの立場から分類する活動を行った。また、松江市教育委員会の担当者を学校に招き、公民館の施設や地域における基本的な役割について生徒に理解を深めさせた。

小単元2の冒頭ではまず、生徒をクラス横断的に6つのグループに分け、グループごとに担当公民館を割り当てた。そのうえで、小単元1での学びを振り返りながら「各公民館の取組から『住みたいまち』のヒントを探ろう」という探究課題を生徒とのやり取りから導いた。その過程の一部として、生徒がその時点で公民館について疑問に思っていることや分からないこと、知りたいと思うことなどをグループで整理させた(図12)。続く情報収集の場面では、生徒はインターネット等を使って調べ学習をしたり、実際に公民館を訪問したりした。公民館訪問では生徒は公民館の行事に参加したり、公民館の職員や利用者へのインタビューを行ったりした(図13)。その後、調べ学習や公民館訪問で収集した情報の整理・分析を行った。本校未来創造科では、体験したことや調べた情報を言語により分析したりまとめたりする学習過程を、生徒が自らの学びを意味付けたり、価値付けたりして自己変容を自覚し、次の学びへと向かうた

めの重要な過程として位置付けている。思考ツール等を活用して、自分たちのグループが集めた情報を分類して整理するとともに、他のグループが集めた情報と比較したり、関連付けたりすることで、「公民館の取組や特徴が『住みたいまち』づくりとどのようにつながっているか」という問の核心に迫ることができるよう促した。具体的には、「なぜ、その取組がその公民館で行われているのか」、「その取組が誰にとっての『住みたいまち』につながっているのか」など、タイミングを見ながら問いかけることで生徒から鍵となる言葉を引き出しながら、自分たちの話し合いを自分たちの力で集約させていった。そして、人と人がつながることによって地域が作られること、それが「住みたいまち」につながっていくということに生徒自身に気付かせた(図14)。まとめ・表現の段階では、グループで担当公民館の取組、その背景にある目的や人の思い、生み出されている成果、活動を通して自分が考えた「住みたいまち」についてまとめ、第6学年の児童や各公民館の担当者、保護者に向けてプレゼンテーションを行った。加えて、生徒一人一人に自分の担当公民館について新聞を作らせ、年間を通して学んだ内容をもとに聴き手を巻き込みながらポスター発表会を行った(図15)。

第7学年の生徒の約半数は後期課程からの入学生である。それらの生徒は第7学年で初めて、本校の未来創造科に出会うことになる。前期課程から進学してきた生徒は前期課程の未来創造科において、情報活用スキルやインタビューの仕方などを知り、実践に生かす経験をスパイラルに積み上げてきている。もちろん、後期課程からの入学生も総合的な学習の時間等で類似の経験をしてきているはずではあるが、本校前期課程での指導の方針や水準と同じであるとは限らない。そのこともあり、後期課程では「Information 未来」という時間を設定し(年間約10時間)、情報活用スキルやインタビューの仕方などについてスポットで一斉指導を行っている。本校第7学年の各教科の学習内容や各教科で養う資質・能力との関連も念頭に置き、情報の収集・整理・発信等に際してICTを適切かつ効果的に活用する力の伸長を図っている。なお、後期課程に入ると、各教科の教育内容は専門化・細分化してくるため、単元の教育内容が直接的に未来創造科の活動と直結するという事は少なくなってくる。そのため、本校では後期課程の未来創造科と各教科とのつながりはコンピテンシー・ベースドを主としていることを申し添えておく(幼稚園、前期課程ではコンテンツ・ベースドの側面のつながりも大きい)。

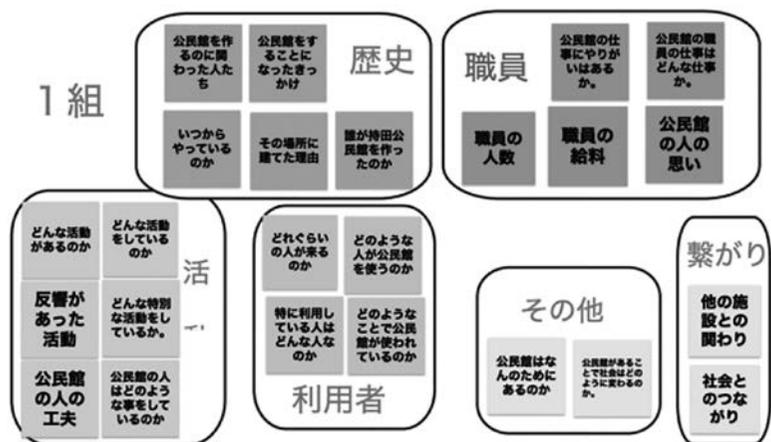


図12 公民館について知りたいこと



図13 インタビューの様子



図 14 整理・分析の作業の様子

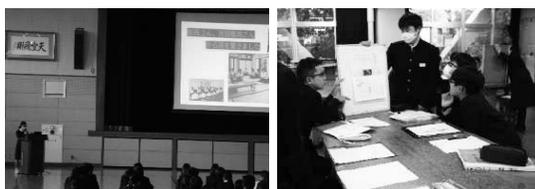


図 15 プレゼンテーションとポスター発表

表 5 第 7 学年における未来創造科での学び

探究的な学習過程	学習過程の具体的な活動
課題設定	公民館の存在と住みたいまちのつながりについて問をもつ。
情報収集	調べ学習や公民館訪問をとおして、公民館の取組について「知らないこと」、「知りたいこと」を自分で特定し、調べる。
整理・分析	公民館の取組や特徴が『住みたいまち』づくりとどのようなようにつながっているかという問に対する自分の回答を生み出す。
まとめ・表現	公民館の方、6年生、保護者に向けたグループ・プレゼンテーションと個人での新聞づくり・ポスター発表を行う。
教科学習との主なつながり（資質・能力）：(国語科「話を聞いてメモを取ったり、情報を整理したりする」、「より客観的で説得力のある根拠を示す」、社会科「人々の多様な生活と環境について、自然条件や社会条件と関連付け、多面的・多角的に考察する」、数学科「表、グラフを相互に関連付けて考察する」、理科「事象を理解・把握するために観察する」、「分類の規準に基づいて分類する」、英語科「多様性を受け入れながら協働的に学ぼうとする」など)	

5. 第 8 学年の未来創造科：地域課題探究② 社会と関わる

本学年の生徒は前年度、「社会を知る」をテーマとし、主に公民館訪問を通して公民館の活動の背景には地域の特性や、さまざまな年齢層の地域住民の想いがあることを見だし、「住みたいまち」について考えた。これに続く第 8 学年では「社会と関わる」をテーマとして職場訪問を行い、地域で働く人たちの仕事内容や想いがつながり合って「まち」がつけられていることに気付かせることで、働くことの意義や自己の生き方を考えていくための資質・能力を育む。この学習は、第 9 学年において、生徒が実社会の課題を解決するための社会参画活動を実践する基盤としても位置づいている。

第 8 学年の未来創造科では「山陰みらい教室」と「職場訪問」の 2 つの活動があり、4 つの小単元で構成されている。小単元 1 では、外部講師の講話を聴き、地域の良さや課題について理解を深めた。小単元 2 の「山陰みらい教室・未来の島根が No.1」をテーマにした学習では、中学生らしい柔軟な発想で地域の未来を明るくするアイデアを各自で生み出し、プレゼン発表会を行った。研修会で授業公開を行った小単元 3 では、「職場訪問」を通して、生徒一人一人が漠然と思いついている「住みたいまち」の本質について探究的に思考を深めるとともに、その「住みたいまち」＝「社会」の中での（あるいは社会の一部としての）自己の将来の生き方を考える活動を設定した。小単元 3 の探究課題を「地域で働く人たちの想いと『まちづくり』のつながりを明らかにする」と設定し、具体的探究過程を構想した。

課題設定の場面では、第 7 学年での公民館訪問などの学習を通して、自分の考える「住みたいまち」が自分を中心としたイメージ（「自分⇔対象・環境」の線）から、他者とのつながりを意識したイメージ（「[他者⇔] 自分⇔対象・環境⇔他者 [⇔自分]」の輪）へと変容していっ

た過程を振り返った。そして、小単元3では社会の重要な構成要素の一つである職場・職業に目を向け、「企業活動とまちづくりの関係を明らかにする」という探究課題を共有した。

情報収集の場面では、生徒はそれぞれが訪問する職場の職業についてインターネットで情報を収集した後に、探究課題に迫るために職場訪問先で働く人にインタビューで尋ねてみたい質問を自分たちで作成した。なお、インタビューの方法や具体的な質問作り・組み立てなどについての指導は事前に国語科と協力して行った(図16)。1回目の職場訪問では(図17)、生徒は企業や組織の理念等や仕事内容を中心にインタビューを行うとともに、職場の人たちから現在困っていることに関する「課題」を提示された(学校のほうから事前に訪問先をお願いしていた)。1回目の職場訪問の後、生徒にはその「課題」を解決するために必要となる情報の追加収集、整理・分析を行わせた。思考ツールなども活用させながら各自で探究的な思考を深めさせることで、社会的な課題は何か単一の事象に起因するものではなく、その背景にはさまざまな要因が絡み合った複雑な構造が存在することや、課題自体の分割可能性(その課題はより小さな課題に分割して対処可能か)の検討の必要性などが意識化するよう促した。この整理・分析の段階はさまざまな教科で養ってきた資質・能力と広範につながっている(特に国語科での「課題の解決に向けた行動を行うために必要な情報を整理する学習」や社会科の「地域社会における現状や課題が生じる背景について、地域の特徴と関連付けて捉える学習」)。2回目の職場訪問では、各職場グループ(3人程度)で職場の人から提示された課題の解決、解消のための具体的な提案についてプレゼンを行った(まとめ・表現の活動)。さらに、この2回目の職場訪問は2回目の情報収集の場面としても位置付けており、生徒は「まちづくり」の視点から(上述の、企業・組織としての課題の認識とも関連付けながら)、職場の人がまちの住民や将来のことを考えて大切にしていること、地域への想いなどについてインタビュー調査を行った(図18、図19)。

職場訪問で行う情報収集でのインタビューを考えよう。

- ①知りたいこと(問)
- ②インターネットなどの情報
調べたけどわからないことは「？」しておく
- ③インタビューする内容
- ④作戦 ①どの順に質問するとよいか
→深掘りする追加の質問は?
- ⑤インタビューでわかったこと
(インタビュー後にまとめる)

図16 インタビューのポイント



図17 1回目の職場訪問

2回目の職場訪問で得たインタビューの結果を整理・分析する過程では、自分が訪問先から得た情報と他の職場を訪問した生徒が得た情報を比較したり関連付けたりして、働く人たちの取組や想いなどを解釈させ、自分たちの言葉で語り直す活動を行わせた。地域で働く人たちとまちづくり、あるいはまちづくりに対する想いとの関係について深く考えさせる場面を設定した。生徒はこの活動を通して、職種や職業は多種多様であるがどの仕事も人が社会の中で豊かに生活するために必要な仕事であり、働く人たちの想いがつながって、「まち」がつけられていることに気付いていた(図20)。その後、職場訪問を核とする小単元3最後の「まとめ・表現」の活動として、これまでの学習を振り返って探究課題に対する自分なりの結論について考えを

働く意義

- ・働いていて楽しいこと、うれしいこと
→なぜ
- ・働いていて悲しいこと、つらいこと
→どうやって乗り越えたのか
- ・神職に就こうと思った理由
- ・どのような想いで働いておられるのか

まちづくりとの関係

- ・お祭り以外で町民と関わることは何かあるのか
- ・どんな人が参拝に来ているのか
- ・お祭りには主にどんな年齢層の人が参加するのか
- ・このまちはどんな街だと思うか

図18 ある生徒の質問(抜粋)



図19 2回目の職場訪問

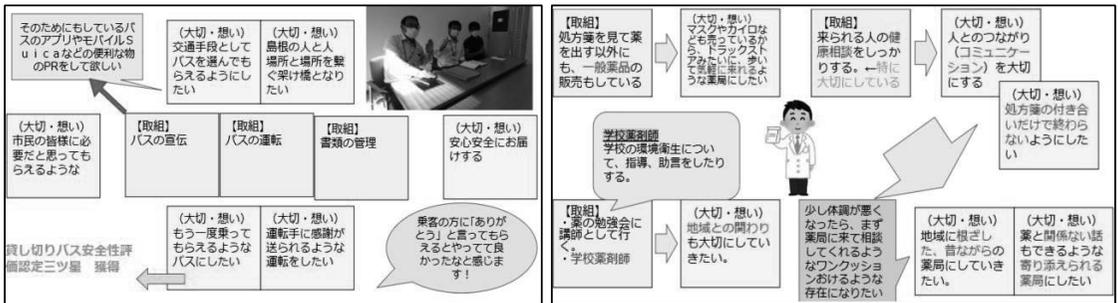


図 20 職場・職業とまちづくり

表 6 第 8 学年における未来創造科での学び

探究的な学習過程	学習過程の具体的な活動
課題設定	企業活動とまちづくりの関係を明らかにするという探究課題を共有する。
情報収集 職場訪問 1 回目	調べ学習や職場訪問でのインタビューをとおして、会社や組織の理念等や仕事内容、課題などについて知る。
整理・分析	訪問先の職場が抱える課題の原因を分析し、その解決、解消のアイデアをプレゼンにまとめる。
まとめ・表現 職場訪問 2 回目	訪問先の職場でプレゼンを行う。
情報収集 職場訪問 2 回目	「まちづくり」の視点から、職場の人がまちの住民や将来への想いについてインタビューを行う。
整理・分析	生徒同士で異なる訪問先から得た情報を比較したり関連付けたりして、働く人たちの取組や想いなどを解釈して自分たちの言葉で語り直す。
まとめ・表現	下級生である 7 年生に向けて、探究課題に対する自分なりの結論をまとめてプレゼンテーションを行う。

試行錯誤（職場訪問の反復）

教科学習との主なつながり（資質・能力）：（国語科「課題の解決に向けた行動を行うために必要な情報を整理・分析する」、社会科「実社会における現状や背景を捉え、解決すべき課題の解決に必要な知識を身につける」、「地域の課題が生じる背景について、地域的特色と関連付けて、多面的・多角的に考察する」、数学科「不確定な事象の起こりやすさについて考察する」、理科「解決する方法を立案し、その結果を分析して解釈する」、外国語科「日常的な話題について、考えたこと、調べたことなどを聴き手を意識し、効果的に表現する」など）

深め、成果をまとめて発信させた。発信の対象は 7 年生とし、聴き手を巻き込みながら抽象的な内容を相手に分かりやすくプレゼンテーションを行った。続く小単元 4 では、第 8 学年全体の取組の「ふりかえり・価値付け」を行った。年間を通じての活動から感じた自他の変容等を客観的に捉え、自らの取組の効果や成果、限界や改善点について内省的に分析する。

Ⅲ 教科の学びを生かす場としての未来創造科

2023 年度、鳥根大学教育学部附属学校園では、未来創造科を軸とする幼稚園から 9 年生までの 11 年間を通したカリキュラム・マネジメントの実質化を図った。10 月に開催した保育・未来創造科研修会では 5 つの学年の授業を同時公開し、外部から 65 名の参加者があった。参加者のアンケートを見ると、「幼小中の連携がみられた。教員同士で同じねらいをもって活動することの重要性を感じた」や「地域社会との連携を強化し、学んだ知識を還元するための取り組みを考えている」といった学校園内部および学校園と地域との連携協力を高く評価する声

が多く見受けられた。これらの点はまさに未来創造科がねらいとするポイントであり、未来創造科における一連の教育活動の成果を参加者と共有できたことは意義深い。また、興味深いことに、学校園内の振り返りアンケートのコメントを見ると、当事者である本学校園教員の未来創造科に対する意識が以下の2つの側面に変化している傾向を見て取ることができた。

第一に、11年間の未来創造科を軸とするカリキュラムの存在とその効果を実感できた、という主旨の回答である。確かに未来創造科のカリキュラムは学年縦断的に作られているとはいえ、実際に一人の教員として特定の学年で指導にあたっていると他の学年の教育活動は目に入りにくい。全校でのカリキュラム・マネジメントによって組織力の向上が認められたと言える。

- ・全体を通して、未来創造科にどう取り組むかがわかってきたことが良かった。前期としては、それぞれの学年の学習が明確になり、研修会ではない時に、ちょっとのぞいても、なんとなく学習のねらっていることが見えてくるようになった。
- ・個人的にですが、今回幼稚園と1年生の授業を見ることができ、この土台が9年生まで繋がっていくのだということ強く感じ、11年間のスパイラル的なつながり、深まりみたいなものをイメージすることができ、感動しました。
- ・みんなでやる良さを学んだ。いつもは教科ごとなので、いつだれが研修をしているか同じ学校なのに励ましあえていないし、仕事への配慮もしてあげられていない。みんなで頑張るということは、子ども同様、職員集団づくり、学校づくりの視点でも大切だと思った。

第二に、教科と未来創造科の学習のつながりを、研修会の公開授業担当者以外の教員も強く感じた、という主旨の回答である。本学校園ではこの「つながり」について、(少なくとも当座は)後期課程ではコンピテンシー・ベースドを重視すべきであり、幼稚園と前期課程ではそれに加えてコンテンツ・ベースドも多分に加味する必要がある、と認識している。これまで、この認識に基づいて図1の「つながり表」を作成のうえカリキュラム・マネジメントにあたってきたが、その成果を教員自身が実感できたという証左が得られたことは特筆に値するであろう。

- ・未来創造科の授業について他学年の活動を見ることができ勉強になった。ICTや付箋それぞれの役割があるので、今後の未来の授業だけでなく教科でもどちらがより生徒の深い学びにつながるか考えたい。
- ・個別最適な学びを支えるICT機器の導入・実践イメージ、各教科が考える前提となる見方・考え方について、具体的に考えることができたし、私自身にとっても新しい切り口で授業や学びを考えるきっかけとなった。
- ・当日の授業(5年)で、「相手に伝える目的と方法」を軸にして授業をしておられ、まさに外国語と同じだなと感じた。外国語では目的・場面・状況を明確にして授業を展開していくが、まさに自分がしていかなければならないことのうちのひとつだと思いました。今している単元で活かそうなので、授業を見させてもらって良かったなと思う。

他方、改善が必要なポイントについても具体的な意見が挙がった。来年度以降、これらの意見も踏まえ、さらに本校未来創造科をよりよいものにしていきたい。

- ・わいわいランド（幼・前）の取組も、考え方をかなり修正したと思います。それらの積み重ねと後期の現在の内容を今一度並べて、私たちが目指す未来創造科が何なのかみんなで話しても良い時期ではと思います。数年間見直しをもって、ひととおりの完成年度を設定して取り組んでいくのもありではないかと思っています。
- ・授業に枠組みできてきていると思うが、ややまだ教師の指示で動いているように思う。子ども自身が課題を見出すことから探究は始まるので、各学年で情報・事象に出会い、課題を見出し、知りたい、解決したいという思いで活動が進むとよいと思っています。
- ・視点がぼやける。ICTについては、探究する児童・生徒の姿につながるツール（手段）としての位置づけとしてはよいかもしれないが、未来創造科としての発信は、あくまでも授業がメインだと思います。
- ・情報収集や整理分析の過程では、ICTが結果として必要になると感じました。そのため、研究の余地はあると思います。

謝辞

本稿の執筆に際しては、島根大学教育学部附属学校園長 大島 悟 先生、附属幼稚園副園長 太田 泉 先生、附属義務教育学校前期課程副校長（当時）和田律夫 先生、附属義務教育学校後期課程副校長 小村 聡 先生には多大なるお力添えをいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 森下博之・鶴原 渡・鎌田真由美・錦織裕介・濱野富由美・河添達也・御園真史・深見俊崇・香川奈緒美・下村岳人・猫田英伸（2022）「島根大学教育学部附属学園における11年間を通じた「未来創造科」のカリキュラム開発」『島根大学教育臨床総合研究』21巻，199-213.
- 2) 大谷由香・中尾祐子・伊東孝之・河角公二・小川千秋・森下博之・竹吉昭人・猫田英伸・伊藤 優・加藤寿朗・深見俊崇・川路澄人（2023）「島根大学教育学部附属学園における『未来創造科』を軸としたカリキュラム・マネジメント」『島根大学教育臨床総合研究』22巻，119-134.
- 3) 佐藤 響・大山朋江・大谷由香・森下博之・深見俊崇・猫田英伸・川路澄人（2023）「地域の公民館の役割から『住みたいまち』を考える－附属学校園 未来創造科 第7学年カリキュラム改善－」『学校教育実践研究』6巻，77-91.